

## 静寂

山本明

焼酎のせいもあり

九時に床につく

十二時ころ小水に起きる

戸外より差す明かりをたよりに

畳の間、廊下、トイレ

台所のコップの水を二口

よろよろ蒲団に戻る

一時間半後

音のない世界にいる

わずかな時間

深海のカプセルの中で

水の静寂にくるまれている

二時間後、夢にうなされる

内部告発した人を組織が捜している

部下の一人が私だと告げる

不正をした幹部から電話がかかる

役員室の扉を開ける

人影に近づくと、ところで目が覚める

枕元の携帯電話は三時半

横向きになり片手をついて起きる

居間の電灯を点ける、まばゆい

庭を横切り、門先の朝刊を手にする

外灯の明かりに一面の見出しを読む

拍子抜けした細文字に安心する

戻り、テレビ欄から前へと引き返す

四時になると民放二社のニュース

いずれも重大事件なし

読み止しの『仏教の真実』を手取る

「ブツダは我々と同じ人間である。」

五時二分京成の始発電車が背戸に行く

九千歩の江戸川散歩が待っている